

【宮城県漁業士会中部支部：情報発信・受信ニュースレター】

第2号発行にあたって - 斎藤 幸一 副支部長 -

新たな年が始まり、寒さが厳しい中で、会員の皆様は浜作業に励んでいることと思います。

今年は、震災から4年目を迎え、施設の復旧や漁業の再開、安定経営と復興に向けた取組を進める年になるものと考えています。

その意味で、本号では、会員が震災時に感じた気持ちを振り返りながら、現在の想い、そして、将来に向け、どのように考えているかを聞き取りし、漁業士一人一人が復興に向けて浜の牽引役としての役割・気持ちを確認できるよう、インタビュー形式でご紹介します。

今後も、漁業士会活動を通じて、会員間の交流と浜の復興が進むよう、ご理解、ご協力をよろしくお願い致します。



斎藤 幸一 副支部長

阿部 慶昭 青年漁業士 (JFみやぎ北上町十三浜支所所属)

——震災直後の浜の状況と漁業者皆さんの状況はどうでしたか？

浜は絶望感に溢れていました。住居や船、養殖施設や保管資材など全てが流出した漁業者が大勢でした。ガレキが無数にある海を見たとき、この海が復活するのか、不安しかありませんでした。

——震災から2年9ヶ月、どのような想いで復旧・復興に取り組んできましたか？

地区内の漁業者4人で【株式会社鶴の助】を設立しました。今まで一人で全てをこなしてきましたが、仕事を4人共同で行うことで、役割分担できるようになり、効率的にできるようになりました。共同で新たな取り組みを行っていくことで、結果的に4人で震災前のレベル+αの仕事ができればと考えています。

——自らの漁業の復興状況は？震災前後での変化は？

日を追うごとに仕事量も増え、忙しい毎日ですが、充実しています。震災前と比べ、仕事に対するモチベーションが高まっています。会社組織になり、より良い製品を作るため、各メンバーが切磋琢磨しているからだと思っています。

——今年1年、どのような気持ちで漁業活動を行っていこうと考えていますか？

会社組織で生産活動を行っていく中で、今年は真価が問われます。目標は、目の前の仕事を着実にこなすことを一番に考え、気持ちと肉体に余裕ができれば、養殖技術を向上させるための試験などに取り組む事ができればベストだと思っています。

株式会社鶴の助とは・・・

震災後、石巻市十三浜でそれまで単独で漁業を営んでいた漁業者4人が集結し、共同作業による負担の軽減、作業効率の向上、養殖技術の改良等を目標として立ち上げた会社です。

◆HP(URL): <http://unosuke.jp/index.html> TEL: ☎ 0225-66-2088 ◆



阿部 慶昭 青年漁業士



共同作業で大忙し！



塩蔵ギールわかめ

塩蔵ギールこんぶ

木村 千之 指導漁業士 (JFみやぎ表浜支所所属)

——震災直後の浜の状況と漁業者皆さんの状況はどうでしたか？

津波により、浜にあった全ての施設が流されてしまったため、震災後2週間くらいは、私を含めみんな、何も手につかない日が続いていました。

——震災から2年9ヶ月、どのような想いで復旧・復興に取り組んできましたか？

震災当初、若い人からは漁業の再開は厳しい、やめざるを得ないとの声が出ていたため、何とか浜に人を残すにはどうしたらよいかを考えました。浜に人を残すためには、早く漁業を再開させることが必要と考え、浮きタルや桁綱などの養殖資材を回収しました。5月にはワカメ養殖を再開させるため資材を共同発注し、また、沖出しして漁船が残った船主は、7月からアナゴ漁を再開、その頃から浜全体が漁業を早く再開させようと動きだし、これまで取り組んできました。



木村 千之 指導漁業士

——自らの漁業の復興状況は？震災前後での変化は？

カキは6割ほど復旧。昨年12月には共同かき処理場が完成したため、ようやくむき身出荷ができるようになりました。ワカメは100%復旧し、2月半ばから収穫を予定していますが、値段が気になるところです。

——今年1年、どのような気持ちで漁業活動を行っていこうと考えていますか？

養殖施設や漁船、漁業活動機器等の復旧整備の見通しが見えてきたため、今後は、漁港・港湾の復旧に力を入れ、この1年である程度、復旧の目途をつけたいと思っています。

☺ 会員の皆様に一言

浜で生きていくのであれば、早く震災前の生産体制に戻す必要があります。前に進むしかないと思います。皆さんも頑張りましょう。

鈴木 公義 指導漁業士 (JFみやぎ女川町支所所属)

——震災直後の浜の状況と漁業者皆さんの状況はどのような感じでしたか？
また、今はどのような雰囲気ですか？

震災直後は、自身や家族が生きることを考えるので精一杯な状況であり、漁業の再開について深く考える余裕はありませんでした。私自身は、震災から1~2ヶ月後には、残った船で漁具の回収を行っていましたが、皆さんそれぞれの事情によって漁業再開に向けた活動は異なっていました。その後、行政から激甚(養殖施設復旧補助事業)などの復旧支援策が周知されてから、漁業再開に向けた気運が高まってきたと思います。現在は、ホタテ、カキ、ホヤ、ギンザケ養殖などの復旧に向け、各自で取り組んでいる状況です。



鈴木 公義 指導漁業士

——震災から2年9ヶ月、どのような想いで復旧・復興に取り組んできましたか？

震災後、多くのものを失い、それらを一から揃えなければならなくなったことをきっかけに、漁業を行う上で必要な全てを親から引き継いできたものであったこと、自分は海で育てられてきたことを再認識しました。

今回の震災で親のありがたみを深く感じるとともに、自分が引き継いできた漁業を何としても復興させ、次の世代に引き継いでいかねばならないという強い思いを抱きながら、これまで取り組んできました。

☺ 会員の皆様に一言

会員の皆さんも毎日浜作業が忙しく、立場は同じですが、情報を共有しながら、復旧・復興へ頑張りましょう！

——自らの漁業の復興状況は？震災前後での変化は？

カキは震災前と同じ10台復旧。震災翌年の春に挟み込みした5台分については、昨年春から出荷（むき場がなく殻付）しています。震災後、漁業活動で初めてお金を手に入れたときは、喜びもひとしおで、将来への希望も強く持てました。現在は殻付での出荷ですが、将来的にはむき身出荷も考えていきたいと思っています。

定置については、カツオー本釣り向けの餌イワシが主でしたが、震災を機会に養殖に絞ることも考えました。しかし、餌の確保に不自由している一本釣り漁船からの励ましや、女川の「定置網文化」を次世代に伝えたいという思いもあり、再開することにしました。4月には、1つ目の網が納品される予定ですが、替え網の納品はもう少し先になりそうです。いずれ、今年中には再開する予定です。

——今年1年、どのような気持ちで漁業活動を行っていかうと考えていますか？

昨年のカキ出荷に続いて、定置網再開の見通しもち、本当の意味での再スタートの年。より一層頑張りたいと思っています。

☺ 会員の皆様へ一言

漁業活動を再開する中で、海の豊かさを再認識しています。我々の宝物である「海」を有効に活用し、みんなで幸せになれるよう、頑張っていきましょう。

豊島 富美志 指導漁業士 (JFみやぎ石巻市東部支所所属)

——震災直後の浜の状況と漁業者皆さんの状況はどうでしたか？

震災直後、壊滅的な被害を受け、浜が混乱する中、東浜地区の5地区を統括する災害対策本部長に任じられ、地区住民の衣食住を確保するなどの任務を全うするため、怒濤の日々でした。当初は、自らの漁業を再開させることなど考える余裕はありませんでした。

ただ、その中でも、震災の年から浜の行政区長にも就任していたため、地区住民と役割分担しながら、流れ着いた資材回収や種ガキ採苗など、浜全体で漁業再開に向けた準備を行っていました。結果的に、その時の行動が、今シーズンの出荷に結びついていると思っています。



豊島 富美志 指導漁業士

——震災から2年9ヶ月、どのような想いで復旧・復興に取り組んできましたか？

約7ヶ月間の災害対策本部長としての任務の中で、様々なボランティア、自衛隊、警察などの方々との知り合い、また、彼らに多くの救援、援助の手を差し伸べていただきました。そのおかげで、浜は一応、元気を取り戻しつつあり、人との繋がりをきっかけに、カキの新たな販路も開拓することができました。震災の2ヶ月後に、自衛隊の方々に感謝の気持ちを伝えるために披露した浜伝統の「獅子風流」は、住民の心の支えとなり、後世に伝えなければならないことを、震災を機に強く思うようになり、浜が復興に向かう気持ちを支える大切なものだと思います。

——自らの漁業の復興状況は？震災前後での変化は？

今年、カキ養殖施設については、震災前に設置していた10台に復旧する予定ですが、震災後2~3年という短期間では、震災前の収入には至っていません。また、現在、ノロウイルスなどの影響で、カキの単価が低迷し、厳しい状況が続いています。しかし、昨年11月に待望のカキ処理場が完成したため、とにかく前に進まなければならないと感じています。

——今年1年、どのような気持ちで漁業活動を行っていかうと考えていますか？

震災後、全国や海外からも支援を受け、ここまで立ち上がれました。あの当時のことを経験したことにより、**どんな逆境にも屈しない強い精神力**が身につきました。震災前のように仕事ができるようになることが、支援者に対する最大の恩返しだと思いますので、着実に前に進んでいきたいです。また、平成25年3月、周りからの薦めもあり、『震災直後からの回顧録「3.11 あの日から」』を出版しました。次世代に残す記録として、浜の防災に少しでも役立てばよいと思っています。



回顧録「3.11あの日から」

☺ 会員の皆様へ一言

数年間、後進に道を譲ろうと思い、漁業士会の総会や研修会に出席していませんでしたが、このような形で掲載されることに戸惑いを感じながらも、皆さんの参考になればと思い取材を受けました。

中部支部 午年男にインタビュー

須田 稔樹 青年漁業士 (JFみやぎ表浜支所所属)

——平成25年(昨年)はどんな1年でしたか？

早く震災前のカキ養殖と小型定置網漁ができるよう地区内の同世代1人と共同で取り組んできました。定置網漁は昨年4月から再開、現在は、殻付きカキの出荷を行っています。働くことの喜びを感じ得た一年でした。

——平成26年は48歳の年男ですが、どんな1年にしたいですか？

まずは、震災前のような漁業ができるようにし、さらには、共同で行うことによる作業の効率化や経費削減が目に見えるよう1年間頑張っていきたいと考えています。



須田 稔樹 青年漁業士

細川 泰宏 青年漁業士 (JFみやぎ石巻地区支所所属)

——平成25年(昨年)はどんな1年でしたか？

震災前の生産に戻すことを第1と考えて、昨年には震災前の台数に復旧することができました。また、震災後、栃木県の『道の駅』で、殻付きカキの蒸し焼き販売を行い、宮城県産カキの美味しさを一般の方に知ってもらい、より多く食べてもらえるようにPRしています。

——平成26年は48歳の年男ですが、どんな1年にしたいですか？

目の前のやるべき事を一生懸命行うことが大事だと考えています。多くの方が、私たちの浜に来てもらい、私たちが生産したカキをもっともっと食べてもらえるように、蒸し焼き販売などを通してPR活動をしていきたいです。



細川 泰宏 青年漁業士

事務局からのお知らせ

※浜の壁新聞第1号(H25.11月発行)は、漁協支所及び関係機関にも送付しています。

◆漁業士間の交流を進めましょう!!◆

『平成26年度中部支部漁業士会通常総会』を、平成26年3月に開催します。通常総会の開催に合わせて、研修会も開催いたしますので、皆様、是非出席願います。

【追伸】管内では、震災により養殖施設の全てが流出してしまいました。各浜では、いち早く養殖業を再開させるため、養殖施設災害復旧事業(激甚事業)を活用し、これまで一生懸命に取り組まれてきたと思います。

集計途中の段階ですが、1月7日現在、管内の復旧台数は11,314台。これまで、躍起になり復旧に取り組まれてきた漁業者の皆様、組合の皆様、大変お疲れ様でした。この春からは、震災後に再開した養殖ホヤの水揚げが予定されており、今から楽しみにしています。《事務局T》

宮城県漁業士会中部支部事務局

(東部地方振興事務所水産漁港部水産振興班)

〒986-0812

石巻市東中里1丁目4-32 石巻合同庁舎内

TEL 0225-95-7912 FAX 0225-96-2698